



# 異文化体験ツアー 台湾

## ～第1回実施報告～

なぎさ公園小学校  
教頭 桑原 隆司

### はじめに

なぎさ公園小学校では教育目標の1つ「グローバル生活人を育てたい」に基づく高学年の学びの機会として、毎年夏にニュージーランド研修を行っている。異文化体験の幅を広げる意味で、英語圏ではない国、アジアへも目を向けてほしいという願いから、平成29年度、台湾コースを新設した。

記念すべき第1回は、5・6年生6名が参加し、たいへん充実した研修となった。子どもたちの学びの一端を紹介したい。

### プログラムの特徴

- 現地校訪問交流
  - 英語活用プログラム
- |      |                                    |
|------|------------------------------------|
| 10/5 | 中正紀念堂、小籠包体験、龍山寺                    |
| 10/6 | 薇閣小學訪問交流、凱達格蘭文物館、硫黄谷、足湯体験、地熱谷、淡水夜市 |
| 10/7 | 九份、猴硐、十分、天燈揚げ体験、シェアリング             |
| 10/8 | 故宮博物院、台北101                        |

### 現地校訪問交流

台北市の薇閣小學を訪れ、授業や文化体験を通じて交流を深めた。薇閣は幼稚園から高校までを擁する台北市の私学。小学校から外国語教育や国際文化交流に積極的に取り組んでおり、その一環として薇閣小學が平成27年度、広島を訪れた際、ホームステイと訪問交流を本校が受入れたことから交流が始まった。

到着するとまず、有志(クラブ)児童による獅子舞と太鼓、舞踊で盛大に迎えていただいた。子どもたちはそ



の迫力に圧倒され、完成度の高さにすっかり魅了された。歓迎式後は特別授業として、書道で拓本(文字が刻まれた木や石の上に紙を貼り付け、墨打ちをして写し取る技法)を体験した。薇閣児童がパディとして協力してくれたおかげで拓本を上手に取れた上、子どもたちは打ち解けることができた。

3時間目以降は薇閣パディ児童の所属クラスにそれぞれ分かれて、英語や体育などの授業を体験した。通常授業に一人ずつ入るだけに心配もあったのだが、杞憂に過ぎなかった。両校の子どもたちは、互いに英語や日本語、身振り、手振りを駆使して、懸命にコミュニケーションを図っていた。

昼食会後は本校児童が英語で学校紹介を行った。行事や日常の様子をスライドで示しながら、なぎさの四季を紹介した。薇閣児童たちは興味深そうに発表に耳を傾けてくれた。とりわけ、芝生のグラウンドや掃除の習慣、運動会一部種目のデモンストレーションには歓声があがった。

かくして、楽しい交流のひとつはあつという間に過ぎ、別れを惜しみながら薇閣を後にした。バスの中では子どもたちの充実感に満ちた表情と、パ

ディと一緒に写ったインスタント写真を感慨深く眺め、大事そうにストラップケースに収める姿が印象に残った。

### 英語活用プログラム

研修では、4日間の原則英語による案内に加えて、外国人リーダーと共に観光地を訪れながら、英語でコミュニケーションを図り、台湾やリーダーの出身国の文化を理解することをねらったプログラムが行われた。

プログラムは、当初3日目の予定であったが、2日目から最終日目でフランス人の大学院留学生が外国人リーダーとして帯同する形で展開された。開始にあたり、“Speak English.” “Don’t be shy.” “Mistakes are O.K.”の3つのルールが示された。

2日目の凱達格蘭文物館、北投温泉、淡水から、3日目の九份、猴硐、十分、4日目の故宮博物院、台北101まで、リーダーから与えられる様々なミッションに取り組みながら、名所を訪れた。ミッションには、その地にまつわるクイズや、写真を見せて撮影した場所を探すもの、スタンプラリー、旅行者や地元の方へのインタビューなどがあつた。九份では、人混みに揉まれながらよう



やく撮影スポットを探し当てて喜び、猴硐では指定された猫を探すのに苦労し、トロッコを動かして汗を流した。インタビューについては、初めはやや躊躇したものの、リーダーのサポートで一度体験すると、手応えと要領を得たのか、以後、時間を忘れるほど夢中になって取組んだ。



3日目の夕刻は、ホテルの会議室に会場を移してシェアリングを行った。3日間を振り返り、驚きや発見など、個人の気づきをグループで共有した後、活発に意見交換しながら、模造紙1枚に英語でまとめ、発表した。その様子を見守っていた外国人リーダーとコーディネーターは大いに感心されていた。小学生を対象にした英語活用プログラムは今回が初めての試みであり、とりわけシェアリングを心配されていたようであるが、本校では日常的に取り入れているスタイルゆえに、子どもたちは違和感なく取組んでいた。

### ほんもの体験

小籠包作り体験では、プロの丁寧な手ほどきで、肉と野菜のあんを生地で包んだ。生地を少しずつ伸ばし、ひだを寄せて包む際の力加減が難しく、苦労して一人6つずつ包んだ。一休みし



てお腹がすいた頃、蒸し上がった蒸籠が食卓に運ばれた。自ら作ったものを食すだけに、おいしさもひとしおであった。ところが、続いて同じ材料でプロが作ったものを一口含んだ瞬間、皆一様に目を丸くした。「同じ材料なのに全然違う」「どうしてこんなにおいしいのだろう」という声があがり、溢れる肉汁に舌鼓を打ちながら、プロの技の素晴らしさを改めて実感した。

また、中正紀念堂では衛兵交代式を固唾を呑んで見守った。北投では地元の人に混じって足湯に浸かり、猴硐の鉱山跡では削岩機や手漕ぎのトロッコに挑戦した。十分では願いを寄せた天燈(ランタン)を空高く飛ばした。台北101では世界屈指の高速エレベーターで時速60.6kmを体感し、世界最大級の振り子型動吸振器(耐風・耐震装置)を見学した。



いずれも本校が大切にしている“ほんもの体験”の場となり、子どもたちの五感を震わせた。

### 食について

4日間、昼食と夕食には食べ盛りの子どもたちでさえ食べきれないほどのご馳走が並んだ。ガイドブックに載っているようなメニューもあれば、地元で親しまれているものもあった。子どもたちは、好奇心を持って積極的に試していた。味付けから風味、食感、彩り、盛り付けまで、五感を食を楽しんだ。淡水夜市や九份では、タピオカミルクティや芋ぜんざいなどの定番スイーツを味わい、また、中には名物の臭豆腐に挑戦した子もいた。その国の生活を理解するには、その地の食を体験することも大切である。

### おわりに

4日間の過密日程に加え、連日30度を越える残暑にもかかわらず、子どもたちは、実に元気よく、好奇心に目を輝かせながら、主体的に活動に取組んだ。

「薇閣での交流が心に残った」「普段よりも英語で話をする機会が多く、楽しかった」「日本と同じ点もあれば、異なる点もあり、新鮮だった」「家族から離れて4日間海外で過ごしたことで自信がついた」など研修を通じて子どもたちが学んだこと、感じたことは様々である。

子どもたちが今後さらに多様な体験を積み、国際性及び人間性を涵養するためにも、本校としては、異文化体験の更なる拡充を図りたい。